

September 2024

Center for Obsidian and Lithic Studies Newsletter

研究の現場から

欧州見聞録

まるで学生時代に戻ったかのように新鮮な1年間でした。2023年5月から2024年3月にかけて、ドイツのキール大学先史学・原史学研究所（写真1）およびベルリン自由大学先史考古学研究所（写真2）を拠点に、在外研究の機会を得ることが出来ました。本来は2020年度に予定していた在外研究でしたが、ビザや住居の手配も完了していた2020年3月に、新型コロナウィルス(COVID-19)のパンデミックに見舞われました。いよいよ出発を間近に控えた4月16日に、無情にも法人として渡航中止の判断が出来てしまい、着任10年目の「ご褒美」も潰えたのでした。幸いにも2021年度への延期が認められましたが、変異株の波状攻撃を受けて、ふたたび渡航を諦めざるを得ない状況になりました。日欧両サイドの入国制限に加えて、現地機関の受入態勢も整っておらず、苦渋の決断を下すことになったのです。結果的に学内外の諸機関に多大なるご迷惑をお掛けしてしまいましたが、それだけに3年越して渡独出来たことは、ひとしおの想いでした。

『ニュースレター』No.18の内容とも重複しますが、今回の在外研究では「狩猟採集社会における土器の誕生」がキーワードでした。人類史における土器の誕生をめぐっては、定着性の高い農耕社会の成立と結び付けて理解されてきた歴史があります。少なくともヨーロッパ考古学の世界では、それは「新石器革命」の重要な構成要素の一つとして位置付けられ、農耕社会の時間的・空間的な広がりとともに土器生産が広がっていったというのが支配的な考え方でした。しかしながら、過去20余年の間に、こうした考古学の常識は大きく見直されることになりました。今日では、中東地域における農耕社会の成立に大きく先んじて、極東地域や北アフリカで土器が出現している点が鮮明になっています。こうして狩猟採集民の果たした役割が脚光を浴びるなかで、極東地域における「土器の誕生」をグローバルな問題系のなかに位置付けて考えてゆくことが必要になっているのです。

こうした背景のもとで、筆者は大きく二つの目標を掲げることにしました。一つは、ヨーロッパと北アフリカを中心に、当該テーマの最新の動向を把握すること。そしてもう一つは、極東地域の最新の動向をグローバルなテーマのなかに落とし込んで発信してゆくことでした。幸か不幸か、ヨーロッパ考古学の世界で、私の実績など限りなくゼロに近い状態でした。ならば、いくらでも失敗が出来る、と前向きに捉えて、ひたすら「道場破り」をすることに決めたわけです。ヨーロッパの中心という地の利を活かして、

目次 Contents

- *研究の現場から 1
- *シンポジウム報告 2
- *黒耀石研究センターピックス 4

毎週のように各地の研究者にコンタクトを取って、「私の情報をプレゼンするから、そちらの持っている情報も提供して欲しい」、「そちらの資料や現場を見せて欲しい」とどんどん乗り込んでゆくわけです。我ながら臆面もなく感じますが、かえって先方も興味をもって歓迎してくれたように思います。普段の職務から解放されたを良いことに、ときには初めて名前を聞くような小さな町を訪問し、ヨーロッパ中の研究者と情報を交換できたことは、実に得難い経験でした。

この一年間の経験はあまりに濃密で、残念ながらここに書き尽くすことは出来ませんが、数多くの研究者の方々に本当にあたたかく迎え入れていただきました。すでに退職した高名なデンマークの研究者が、何日にも渡って自家用車でユトランド半島の中石器時代の遺跡を案内してくれたこと。急遽講演の依頼を受けて、同じくデンマークのファルスター島の博物館に向かったところ、30代を中心とする若手研究者が会場に集まって、熱心に質問攻めにしてくれたこと。マイナス20℃のリガに資料調査に出向いたら、日本人以上に資料を細部まで観察するラトビア人研究者と出会って、意気投合したこと。ドイツ国内の公共交通機関がストライキで麻痺した際に、ロンドン（！）を経由してベルリンからケルンに到達し、Du bist verrückt!（お前は気が狂っている！）と呆れられたこと。毎週のようにヨーロッパ各地の研究者と交流できたことは、間違いなく今後の財産になると信じています。

少しは学術的なことを書いておかないと、ただの旅行記に終



写真1 キール大学先史学・原史学研究所

わってしまうかもしれません。今回の在外研究で、北アフリカの資料を観察し、最新の動向に触れることが出来たのは、とくに大きな成果でした。エジプトやその周辺地域に波状文を基調とする古相の土器が分布することは以前から知っていました。また、マリで完新世初頭に遡る無文の土器が出土していることも知っていましたが、実資料に触れる機会はありませんでした。そうしたなかでプラハのカレル大学とチェコ科学アカデミー考古学研究所を訪問し、スーダン北部の土器を見学することが出来ました。完新世初頭に遡る土器ですが、驚くほど薄く、また胎土が緻密な点に目を見張りました。文様も精緻に施されており、それに先行する後期更新世の土器が存在することを強く示唆しています。調査者はスーダン南部にさらに古相の土器が眠っていることを推測していますが、むべなるかな。まだまだ今後の展開から目が離せない地域です。

こうした研究交流の一環として、公式、非公式を含めて毎月のように講演の機会を頂いたことは、なかなか得難い経験になりました。とくにベルリン自由大学で連続講座を担当させていただき、極東地域の最新の動向を体系的に発信できたことは、ヨーロッパの考古学者に対する情報提供という点のみならず、私自身の頭の中を整理する点でも大きな意味がありました。今さら申し上げるまでもありませんが、日本列島における豊富な情報は、それこそ「狩猟採集社会における土器の誕生」というグローバルな問題を



写真2 ベルリン自由大学先史考古学研究所

理解するための貴重な資産に他なりません。その一方で、必ずしもグローバルな興味関心に対して適切なフィードバックが出来ていないことも事実です。極東地域の資産をより広く活かしてゆくためにも、こうしたギャップを埋めてゆくことが我々の使命に他なりませんが、こうした課題とその実践的な克服を試行するための良い機会になったと思います。

それにしても、ヨーロッパの各地を飛び回るなかで、インフレと円安のダブルパンチは余りにも強烈でした。クレジットカードの請求額が月々100万円を超えることもあり、借金返済も目下の課題に他なりません。

(藤山 龍造)

シンポジウム報告

シンポジウム「石器技術をめぐる実験考古学」

実験考古学的アプローチは考古遺物から人間行動を復元するための理論的根拠となり得る中範囲理論として注目されるが、近年ではより多様かつ広範な実験プログラムが研究に取り入れられるようになってきている。2024年6月15日（土）・16日（日）明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント多目的室にて開催されたシンポジウム「石器技術研究をめぐる実験考古学」ではそうした研究現状を鑑み、多様な実験プログラムに基づく石器技術研究を取り上げ、実験考古学の意義を展望することを目的とした。

また、本シンポジウムでは次世代育成の場としての役割も果たすべく、学生・院生に積極的な研究発表・研究会運営への参加を呼びかけた。その結果、研究発表・ポスター発表・ワークショップ



石器製作ワークショップの様子

などのプログラム、シンポジウム運営に14名の学部生・大学院生が参加したほか、2日間でのべ約140人の参加者の内、学部生・大学院生が約50名と多くの若手研究者に参加していただくことができた。ポスターセッションなどでは学生同士が熱心に議論する場面や先輩研究者からの質問に一生懸命に応える若手研究者の姿も垣間見られ、熱気あふれる会場となった。

■プログラム 6月15日（土）

挨拶・趣旨説明：「石器技術研究をめぐる実験考古学」堤 隆（明治大学）

研究発表：「石器は個人を語れるか—彫器削片剥離の実験から—」鈴木美保（明治大学） / 「鹿角ハンマーの基礎的研究」小菅将夫（岩宿博物館）・高草木和佳子（明治大学） / 「基部加工尖頭形石器の素材剥離と二次加工に関する実験研究」金 彦中（東北大）

ポスターセッションコアタイム

記念講演：「石器の実験痕跡研究—私の研究の履歴と見通しー」御堂島 正（大正大学）

石器製作ワークショップ：【ナッパー】井元日向子（東京都立大学）・大場正善（山形県埋蔵文化財センター）・金 彦中・小菅将夫・佐藤祐輔（東北芸術工科大学）・鈴木美保・矢野賢太（明治大学）

【インタビュアー】塩原 健（明治大学）・吉田真優（南山大学）

■プログラム 6月16日（日）

研究発表：「非使用過程における痕跡：後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧を例に」岩瀬 彬（東京都立大学） / 「実験被熱痕跡の適用—ニセコ町西富遺跡B地点の事例ー」薮下詩乃（清瀬

市市史編さん室) / 「石器製作者の技術レベルをどう考えるか」
両角太一(大正大学) / 「動作連鎖復原における実験考古学の意義」
大場正善 / 「使用実験から検討する礫群の機能」保坂康夫(身延山大学)

パネルディスカッション: パネリスト 研究発表者
座談会「教えて大沼先生!」: 大沼克彦(国士館大学) vs 研究発表、
ポスター発表の学部生・大学院生

■ ポスター発表

「石器製作における敲石の分類と用途」塩原 健 / 「低倍率法による石器機能の推定」小池里英(大正大学) / 「縄文時代の石器製作における加熱処理」栗原七海(大正大学) / 「ナイフ形石器の形態と機能」野口智輝(大正大学) / 「実験考古学からみる遺跡形成過程」石田 薫(大正大学) / 「宮ノ前遺跡における細石刃製作技術と石材利用の展開」梅田拓海(明治大学) / 「石器のレプリカ作成と使用痕分析における有効性」吉田真優 / *The debitage pattern of biface reduction by modern flintknapper Meng Fanxiu Tokyo Metroplitan University* (鈴木美保)

シンポジウム「火山災害考古学: 地域社会の罹災とそのレジリエンス」

本2024年元日には能登半島地震が発生、さらには真夏の8月8日に発生した宮崎地震では、初の「南海トラフ地震臨時情報」が発表され、巨大地震への注意喚起がなされた。また、本年は、58名という戦後最悪の死者を出した御嶽山噴火から10年という節目の年にあたる。日本列島という地震と火山の国に我々が生きているのだということを、まぎれもなく実感する時節である。

火山は人類に、黒曜石のようなマグマの恵みをもたらしてくれる半面、噴火災害という試練をも与えてくれる。日本列島は今日111の活火山を有し、地球上の火山1500のおよそ7%を占める世界有数の火山域である。

列島における火山災害において、過去の地域社会がどのような罹災をし、そして復興を遂げてきたか、そのレジリエンスに学び、将来の防災にどうつなげるか、という問題意識を掲げたシンポジウムを、明治大学黒曜石研究センターが主催となって、6月29日(土)・6月30日(日)に明治大学グローバルフロントにおいて、以下のプログラムで開催した。



写真1 講演2 若狭徹先生(明治大学教授)の講演風景

■ 【29日】 プログラム

趣旨説明 堤 隆(明治大学 黒曜石研究センター)

講演1 鬼界アカホヤ噴火と縄文社会への影響

　　桑畠光博(九州大学大学院 比較社会文化研究院)

講演2 棕名山ニツ岳の噴火と上毛野の古墳時代社会

　　若狭 徹(明治大学 文学部)

講演3 富士宝永噴火と江戸社会の動搖・その復興

　　杉山浩平(東京大学 総合文化研究科)

講演4 発掘された天明3年:吾妻川流域の考古学調査でわかった火山災害

　　関 俊明(嬬恋郷土資料館)

講演5 十和田平安噴火と地域社会の動態

　　丸山浩治(岩手県立博物館)

講演6 災害考古学から防災考古学へ:日本災害・防災考古学会の設立
　　関根達人(弘前大学 人文社会科学部)

■ 【30日】 プログラム

講演7 天仁元年(1108)の浅間火山噴火災害と地域社会

　　堤 隆(明治大学 黒曜石研究センター)

講演8 浅間火山の活動史と噴火メカニズム

　　安井真也(日本大学 文理学部 地球科学科)

講演9 浅間火山の観測と火山災害予測

　　武尾 実(東京大学名誉教授・気象庁参与)

特別講演 ベスヴィオ火山の噴火と古代ローマ社会

　　青柳正規(東京大学名誉教授・多摩美術大学理事長・元文化庁長官)

パネルディスカッション

シンポジウムでは、時系列においては、縄文から近世までの歴史的火山災害が語られ、空間域では九州から北海道まで、そして青柳正規先生の特別講演によるイタリアのベスヴィオ火山の噴火と古代ローマ社会までもが論じられた。さらに浅間山を例として、考古学のみならず火山活動のメカニズムやプロセス、今日の火山観測や火山災害予測についても語られ、広く一般公開の講演として、災害と社会に関する問題点が共有されたかと考える。

(堤 隆)

※ 本シンポジウムは、科研費基盤(C)「浅間山南麓の火山災害考古学序論」(21K00960)研究代表者堤 隆の研究事業として実施された。



写真2 特別講演 青柳正規先生(東京大学名誉教授)の講演風景

黒曜石研究センタートピックス

矢島國雄センター員 日本文化財科学会大賞を受賞

日本文化財科学会大賞は、文化財科学に関する研究活動を通して学会の発展に特別の功労があったもの、または学会の目的達成に寄与した個人または団体の業績を対象に贈られます。

2024年度は本センターセンター員の矢島國雄氏（明治大学名誉教授）が受賞しました。矢島氏は本学在任中より長年にわたり文化財科学に携わり、虎塚古墳（茨城県ひたちなか市）の保存に関する活動をはじめとする数々の業績が、文化財の人文科学と自然科学の学際的研究を実践する卓越した功績であると評価されました。2024年7月27日・28日に青山学院大学青山キャンパスで開催された第41回日本文化財科学会大会・総会において授賞式が行われました。（鈴木）



茨城県虎塚古墳石室点検作業を行う矢島氏（2017年11月）
写真提供：ひたちなか市教育委員会

猿楽町研究室に新たに 蛍光X線分析装置が導入されました

猿楽町校舎への機能集約に伴い、蛍光X線分析装置を新たに購入しました。蛍光X線分析装置は物質にX線を照射したときに、その物質に固有のX線（蛍光X線）が発生する原理を利用した機器です。特にエネルギー分散型蛍光X線分析装置は、測定に要する時間が数分と短く非破壊で分析できるため、考古遺物の同定、特に黒曜石の原産地推定によく使われています。

現在、黒曜石研究センターでは、長和センターに据え置き型の蛍光X線分析装置（EDXRF、日本電子社製JSX-3100 II）が設置されており、猿楽町研究室では可搬型蛍光X線分析装置（p-XRF、Innov-X Systems社製 DELTA Premium DP-4000）を保有しており、統計的処理によってどちらの器械でも同じ推定結果ができるよう調整されています。

JSX-3100 IIは最近では後期旧石器時代初期の遺跡として注目されている長野県香坂山遺跡出土の黒曜石、ヒスイ製品の製作地として著名な新潟県長者ヶ原遺跡出土の黒曜石などを分析しました。DELTA Premium DP-4000は可搬型という特徴を活かしてオランダに運ばれ、江戸時代にシーボルトが持ち帰った日本国内出土の黒曜石（バイデン市ナチュラリス生物多様性センター所蔵）

の原産地推定で大きな成果をあげています。

新たに導入されたリガク社製NX DEは、検出器などの改良によって、センターが保有していた2台の機器に比べて高い性能を有し、これまで分離することができなかった原産地のグループを細分できる可能性があります。分析をする側としては喜ばしいことではある反面、既存の2台の分析結果とどう整合させるか、悩ましい問題も浮上しています。

また黒曜石研究センターと連携している長崎大学隅田研究室でも同じNX DEを保有しており、今後は推定方法の共通化や、黒曜石化学組成の相互共有などの課題解決に向けた取り組みを進めていく予定です。（池谷信之）



猿楽町研究室に導入された蛍光X線分析装置リガク社製NX DE

黒曜石研究センター 研究集会の開催について

黒曜石研究センターでは年に一度、構成員の研究成果を発表する研究集会を開催しています。この数年は非公開で行ってきましたが、本年よりオンラインで公開することとなりました。

期日：2024年12月22日（日）

時間：13:00～17:00

形態：Zoomによるオンライン

主催：明治大学黒曜石研究センター

*プログラムや参加方法は決定いたしましたら当センターHP (<http://www.meiji.ac.jp/cols/>) にて発表いたします。

明治大学黒曜石研究センターニューズレター 第21号

発行日：2024年9月30日

編集・発行：明治大学黒曜石研究センター 本部：猿楽町研究室
〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3
電話：03-3296-4424

黒曜石研究センター

〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8

電話：0268-41-8815

URL:<http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印 刷：第三企画株式会社

〒166-0002

東京都杉並区高円寺北2-4-8 1階

電話：03-3346-3373



*当センターでは施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。